

平成18年度課題文作成コンペ 総評

教育的ウラ指導 (ura410.com) 審査委員長
ペンギン

平成18年度課題文作成コンペの総評

今回の課題文作成コンペには、受験生のみならず、合格者の方からの応募もあり、30案を超える作品が集まりました。その中から第1次審査により、006番案、009番案、011番案、014番案、024番案の5案が優秀案として選ばれました。第1次審査は、あくまで模範解答例の出来栄での審査結果であります。この時点で、最も評価が高かったのは、011番案です。課題文を見た時点で、「作成者の意図」のようなものを汲み取れたからです。また、プランニングそのものに「優しさ」のようなものも感じました。次に、024番案の評価が高かったです。このプランも「大枠的なストーリー」の読み取り易さを感じたからです。その他の3案については、正直、プランニングからかもし出されるプライドのようなものが感じられ、こちら（読み手側）から歩みよっていかねば、プランニングの真相を手に入れることができないようなある種の目に見えない壁のようなものを感じました。敷居が高いとでもいいでしょうか。その点、011番案、024番案は、管理ゾーンや、利用者ゾーンなどのゾーニングをククリを追いかけただけで、施設全体の構成が明快に把握でき、自然とプランニング（模範解答例）を通じて、作成者の意図する「ストーリーの世界」へと引き込まれていくのです。言い換えれば、読み手側を手招きして、わざわざ手を引いて、プランニングの中のストーリーの世界へといざなってくれるとでもいいでしょうか。...

しかしながら、ノミネートされた優秀案5案の作成者の方達に、それぞれの模範解答例についての課題文を起してもらい、2次審査が始まると、審査内容は一転し始めます。課題文の緻密さでいえば、006番案、014番案の質の高さを感じました。他の3案の荒削りな部分が目につくことになります。さて、最終的な審査結果をお伝えしたいと思います。

グランプリ案 006番案（9ポイント）
準グランプリ案 009番案（4ポイント）
奨励賞 014番案（2ポイント）、024番案（3ポイント）
（この2案は、僅差であるため今回は、同時入賞とします）

（）内にあるポイントについては、優秀案5案にノミネートされている作成者の方達から、自分以外の案を推薦して下さいとお願いした結果、グランプリ案（3ポイント）と、グランプリ以外の推薦案（1ポイント）という形でポイント集計させて頂いたものです。

下記にそれぞれの案に対する講評を掲載させていただきます。

006番案についての講評

・課題文から湧いてくる大枠的なイメージが反映されているプランだと思います。また、他の案に比べて課題文構成の緻密さを感じました。006番案は課題文自体に展示施設というストーリーを感じることができる一方、解答者にゆだねられている部分を確保しつつも、その反面その部分の重要度は低く（見学デッキの設置表現など）「国語力」をもろに感じるものの出来る課題であると思いました。

・グランプリ案として推薦した一番の決定理由は図面の段階での自己評価が、006番案が最も高得点だったことが大きく影響しています。課題文が優れていても肝心の図面に於いて模範解答図として相応しいものでなければ総合で『優れている』ことにはならないと思いました。

009番案についての講評

・過去問を通してみると、課題文中の主文で異なる用途を有する部門を設定する場合、もしくは、部門の扱いが並列的な場合のみ、“異なる機能”と課題文中で謳っているように見えるため、009番案の主文にある“異なる機能”という表現が適切であるかどうか？疑問が残るという意見もありました。一連の課題文作りを通して「主文」の大切さが身にしみため、なおさら気になりました。ただ、試験問題としてみた場合、消去法で選択するとチーム札幌が1位でした。今年度の試験課題を加味しても面白そうな課題文で、もし、模範解答例を知らないでこの課題文を解けば、かなり解き甲斐のあった課題に間違いないと感じています。

011番案について

・模範解答例の出来栄は、良かったですが、課題文の作成が荒削りなように感じました。

014番案について

・図面の気持ち良さから言っても014番さんのプランは美しく、グランプリ案として推薦しようかと最初は、考えましたが、アトリウムに面して採光を取るということに気づかなければ、かなり時間をとられることとなります。

・昨年の課題文の類似課題だと思います。びっくり玉の既存部とアトリウムモールの適宜がニクイと思いましたが、課題文にしぼりが多く、解答者による部分が少ない気がしました。

・難解すぎて解けませんでした。

024番案についての講評

・課題文の諸条件を読んでいくに連れて、条件に強弱があり、勉強になったからです。断面図の最後の一文を読んでちょっと気が抜けましたが図書室の配置はかなりてこづりました。(笑)

・3層にわたる吹抜けが解き手を悩ませるよい問題なのですが、外部空間との面白さに若干欠ける感がありました。

課題文作成コンペを通して皆さんに伝えたかったこと

今回の課題文作成コンペを振り返って、最も、多かったのは、「自分の模範解答例についての諸条件を課題文に詰め込もうとすると、A3というサイズの限定された用紙の中に納まりきれない！」という感想でした。このように、自分自身で課題文まで、作成してみて、始めて出題する側(=課題文を作成する側)の苦労を痛感することが出来るのです。(優秀案5案、それぞれのプレゼンテーションの内容をご覧ください。)課題文を作成してみて分かること。その最たるものは、「課題文を通じて解き手(受験生)に発信できる情報量の少なさ」となります。常に解き手の立場に回っていると、まさかと感じられるかもしれませんが、実は、この製図試験の課題文内容の大半は、定型文(決まりきった文句の羅列)です。だからこそ、解き手へとメッセージを発信できる手段と、その量には、限りがあり、そういった厳しい条件の中で、作成者側は、課題文を通じて、解き手へと懸命にメッセージを送らなければならないのです。

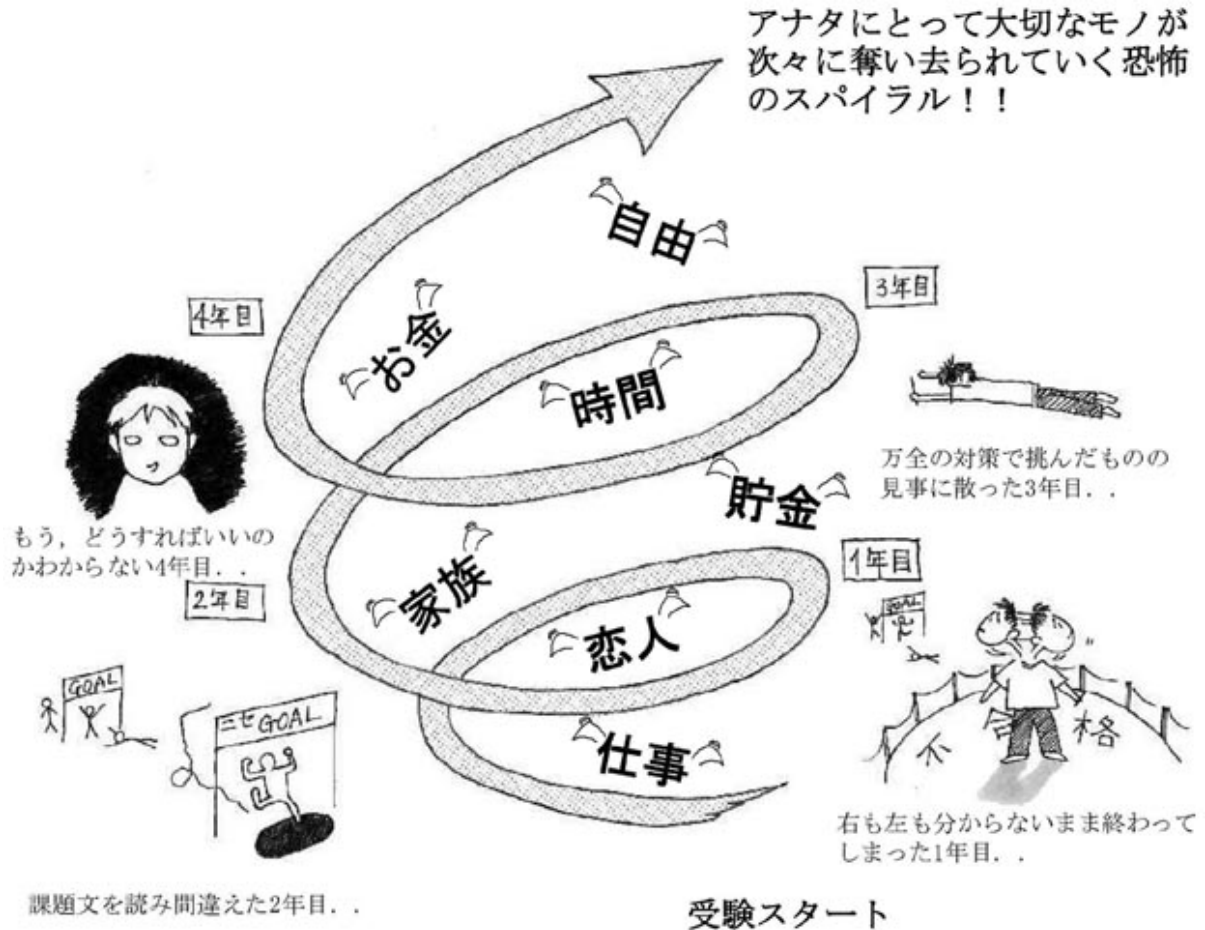
そんなメッセージの存在に気付けないようであれば、不合格となって当然の話であるとも言えます。また、それこそが、「課題文を通じた出題者と解き手のキャッチボール」であり、そういったキャッチボールを出来ることこそが、この製図試験に合格するための必須条件であると言えるのです。ただし、そういった部分は、まず、誰も教えてはくれません。ものすごく不思議なことでもあるのですが、通常、製図試験対策指導を行う場合には、作図の仕方から教えます。次に、エスキースの手法論を教えます。そして、試験本番当日を迎えさせます。

でも、それっておかしな話でもあるのです。この製図試験に合格するために必要なものの優先順位は、次

のような順番になるからです。

課題文を通じた出題者側とのキャッチボール（合否の影響度：大） エスキスの手法論 作図の仕方（合否の影響度：小）

この矛盾が、この製図試験戦争において、多くの受験生達を受験スパイラルへと落とし込んでいる最大の原因とも言えます。（受験スパイラルとは、次図参照。「製図試験のウラ指導（学芸出版社）」から抜粋）



終わりに

最後に、製図試験の合格をつかみ取る上で、最も重要なイメージをお伝えしておきましょう。それは、「1本の木」のイメージです。今回の課題文作成コンペを通して、全体的に感じたことは、「木の幹」の部分よりも、「幹から分かれる枝葉の部分」の方に意識を集中させて課題文を作成しまっているような気がしたことです（プランニングのストーリーについての話です）。いいですか？

そうではありません！

「幹」の部分が重要なのです。施設全体にわたって、1本筋の通った太くて、力強い「幹」。これを、プランニング（模範解答例上）で明確にすること！次、そのメインのストーリー（大枠的なストーリー）を「落としどころ」として設定する技術、それこそが、課題文作成の醍醐味とも言えるのです。だから、「幹」の部分が細くて、「枝葉」の部分が力強いプランや、課題内容では、ダメなんです。このイメージは、本試験にもそのまま、持ち込むようにして下さいね。このイメージを把握して、課題文を読み取れば、必ず勝てますので。これまでの過去の本試験課題を再度、振り返って見て下さい。各年度のストーリーには、必ず、明確な「幹」の部分があることに気付くはずですよ。去年度の本試験課題における「既存部の扱い」のように、それが、そのまま「落としどころ」に直結されていくわけです。今年度のウラ指導主催「課題文作成コンペ」に参加して頂いた皆さん、本当にお疲れ様でした。参加して頂いた皆様、また、審査にご協力頂いた皆様にこの場を借りて、改めてお礼申し上げます。